社会調査としてのナラティヴ・アプローチを特徴づける

富山大学　伊藤智樹

１　目的

報告者は、これまでアルコール依存、死別体験、吃音、難病（パーキンソン病、ＡＬＳ）のセルフヘルプ・グループに参加しながら、参加者たちの変化もしくはその可能性について「物語」概念を用いて研究してきた。参加者たちが自らをどう語るかに着眼するという意味では、「ナラティヴ・アプローチ」というよりも「自己物語論」もしくは「自己物語分析」という方が正確である（伊藤　2017）。これをふまえたうえで、ここでは若干広い視野のもとでナラティヴ・アプローチを社会調査の方法として位置づける必要性について考えてみたい。

２　社会学の中のナラティヴ・アプローチ

1980 年ごろから、学際的な動向として「物語」に注目と関心が高まった。これを「物語論的転回（narrative turn）」と呼ぶ論者がいる。大仰な言い方だと報告者自身は感じているが、ただ、そこには、そもそも学術研究は社会の中でどのような役割を果たすのかという点に関する問題意識（科学もひとつの物語である）が関連している。その点に関する認識ないし温度差は、本シンポジウムでの議論にも何らかの形で影響するかもしれない。

ともあれ、学際的な興隆の中で展開したため、社会学におけるナラティヴ・アプローチの方法を、個別の学問分野内のものとしてまとめるのは、実際にはかなり難しい。そうした中で、Riessman（2008）は、物語の分析の仕方をテーマ分析、構造分析、対話／パフォーマンス分析、ヴィジュアル分析の四つに整理した労作である。ただし、Riessman 自身がこうした分類の不十分さを認めているように、必ずしも重視されていない研究群（たとえば、社会学と看護学の境界に位置するもの）や方法（録音・録画を伴わないエスノグラフィー）も見受けられる。日本の研究では、野口編（2009）が重要だが、学際的に多様なナラティヴ・アプローチを俯瞰しながら、研究方法としての共通点を探る（そして社会学がそのような役割を果たす）ことを標榜するのに力点がおかれているように見える。

報告者がナラティヴ・アプローチの特徴として強調したいのは、ひとつには、ナラティヴ・アプローチは、本来的に<u>個人主体の曖昧さにスポットをあてる方法</u>として発展させるべきではないかという点である。たとえばニーズを表明できる個人、社会運動の主体を引き受ける個人といった、従来社会学でユニットとして扱われてきた個人を、模索と変遷の末に形成されるものとしてとらえ、それに至る前の段階や、そこに至らない状態、あるいは、ひとたび語れた物語を維持しがたくなる局面についてとらえるのに、「物語」概念は優れているのではないかと思う。ただし、この考え自体はまったく新奇なものではなく、先行研究の知見の中にも近いものがある。むしろ報告者の力点は、<u>データと結びついた「物語」の分析</u>を通して実現していくことの方にある。

もうひとつ重要なのは、<u>分析概念としての「物語」と、臨床的な方法としての「物語」とが、完全には分離しがたい</u>、という二面性である。これは、日本において社会学のナラティヴ・アプローチが、家族療法からの影響を少なからず受けてきたという歴史的背景ばかりではなく、さきほど述べた曖昧な個人主体に対峙できるという概念の性質が、人間の苦しみに接近できる性質を自ずともたらす、という点にもかかわる。ただし少なくとも日本においては、こうした部分を積極的に活かそうという風潮はある反面、「物語」を分析概念として整備し鍛えていくという問題意識は、異なる専門分野を横断する議論として盛り上がりにくかったように思われる。伊藤（2013）では、「筋」と「登場人物の性格づけ」を中心にいくつかの枠組みを整備したが、諸分野の研究においては、対象となる物語をどのように分析したのか不明確な（＝いわずもがなのよ

うに省略してしまう）ケースも多い。これは議論の混乱や、ナラティヴ・アプローチは「秘儀的」であるという一般的な印象につながってしまいやすいのではないだろうか。

３　社会の中のナラティヴ・アウローチ

筆者の研究をとりまく環境として、難病や高次脳機能障害のピア・サポートが（公的に）推進されるようになってきており、ナラティヴ・アプローチはその理論的支柱として期待されている。たとえば、2015 年 1 月の「難病患者の医療等に関する法律（難病法）」の施行を受けて、2016 年４月より「療養生活環境整備事業実施要綱」が一部改正されたが、その中には、各都道府県で設置された難病相談支援センターの事業として、難病の患者や家族等を対象としたピア・サポーター養成、およびその活動の支援が盛り込まれている。また、2013 年より始まった富山県高次脳機能障害支援センターのピア・サポート事業も、非専門家であるピア・サポーターを支援プログラムに組み込む点で重要な試みになっていると思われる。

このような営みは、人間同士のやりとりや変化にかかわるため、従来盛んにおこなわれてきた効果測定ではとらえにくいところがある。というのも、かりにピア・サポートの効果の有無を示す事実を説得的に示せたとしても、それは「どのように支援を実践していけばよいのか」という関心には必ずしも応えていないからだ。その点で、ナラティヴ・アプローチは可能性を有しているが、それを活かすためにも、個人の物語がどう変化するのか／しないのかを分析できることが、なおさら重要になってくるのではないか。

とはいえ、その先に発生しうる問題についてあらかじめ考えておくことも必要かもしれない。人々の実践と密に協働的な関係を築くことによって、どのようなことがおこりうるのか。たとえば、事業の「評価」に対するスタンス、あるいはその背後にある人々の「研究」への期待との対し方、といった問題が考えられるかもしれない。

４　結論

学際的に興隆したナラティヴ・アプローチだが、ここにきて社会調査の方法として位置づける必要性は高まっている。その具体的な仕方は試行錯誤を要するだろうが、そもそも「物語」概念の定義からして多様である点もふまえながら、分析の仕方に関する選択肢と射程を検討していく必要があるだろう。

文献

伊藤智樹編，2013,『ピア・サポートの社会学――ALS、認知症介護、依存症、自死遺児、犯罪被害者の物語を聴く』晃洋書房.

――――，2017,「自己物語論」『社会学理論応用事典』丸善.

野口裕二編，2009,『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房.

Riessman, C. K.,2008, Narrative Methods for the HUman Sciences, Los Angels: Sage.（＝2014 大久保功子・宮坂道夫訳『人間科学のためのナラティヴ研究法』クオリティケア）